

助成活動実績報告書

企画名	ミニシンポジウム「日生を里海に」～ひなせ千軒湾漁師の里～
団体名	特定非営利活動法人 里海づくり研究会議

①活動の目的について

沿岸環境等の専門家と日生の海と深い関わりのある地域住民や地方自治体など地域を支える人々が一堂に会し、日生の海の現状や特性などについて知識と理解を深め、里海づくりへの気運を盛り上げるとともに、里海の重要性を広く全国に発信する。

②内容について

備前市日生の地において、日生における里海構想をテーマにミニシンポジウムを開催し、里海づくりや沿岸環境分野の専門家により、日生の沿岸環境特性、アマモ場の役割・機能と再生技術、地場産業として重要なカキ養殖の実状と沿岸環境との関連性、カキ殻を活用した環境修復技術、里海づくりなどに関する講演を行い、これを基調にして、地域の特性や歴史・文化を踏まえ、海の大切さや海と人の関わり方などについて、地域住民や地方自治体など地域を支える人々との意見交換を行った。

日 時：平成 24 年 7 月 3 日（火）13:00～17:00

場 所：日生町漁業協同組合

参加者：70人程度

1. アマモの役割と機能～カキを育てる海草～

鳥井正也（岡山県農林水産部水産課 総括主幹）

2. 岐路に立つ瀬戸内海の漁業

藤原建紀（京都大学大学院農学研究科応用生物科学専攻海洋生物環境学分野 教授）

3. 日生における里海創生論～アマモとカキの里海～

柳 哲雄（九州大学応用力学研究所 教授）

総合討論～会場参加型パネルディスカッション～

コーディネーター：奥田節夫（NPO 法人里海づくり研究会議理事長・京都大学名誉教授）

パネリスト：大久保賢治（岡山大学大学院環境生命科学研究科教授）・清野聡子（九州大学大学院工学研究院環境社会部門准教授）・藤原建紀（京都大学大学院農学研究科応用生物科学専攻海洋生物環境学分野教授）・松田治（広島大学名誉教授）・鳥井正也（岡山県農林水産部水産課総括主幹）・柳哲雄（九州大学応用力学研究所教授）

今回のミニシンポジウム開催に当たり、事前の打ち合わせに要する旅費・宿泊費、当日配布資料の準備、講師及びパネリストの旅費・宿泊費・昼食代、報告書資料の作成及びDVD編集などに使用した。

③この活動によって達成された成果

古くから漁業と海運の町として栄えてきた日生においては、近年の社会経済的な背景や産業構造、沿岸環境の変化の煽りを受け、人と海との関わり方をあらためて考え直す必要性に迫られており、里海づくりへの期待感が高まっている。具体的には、岡山県が主体となって整備を進めている東備地区海洋牧場事業(東備地区広域漁場整備事業 H14~H25 予定)の完了を控え、管理と運営を円滑に実施できるよう行政及び漁協団体で適正利用協議会を組織している。近年では地元の環境業や産業を担う方も参画され、日生全体としての方向性を協議している。そのような中で浮かび上がる問題や解決の糸口が見出しにくい課題などを、第一線の研究者である講師やパネリストが応えることにより適正利用の協議が進むものとなった。

また、地域行政、漁業、観光、海運など様々な立場で海に関わる人々が一堂に会し、知識と理解を共有でき、相互理解と地域の一体感が形成されたとともに、里海づくり推進における地元理解が醸成された。

④今後の計画・展望について

里海づくりを進めていくに当たり、地元の漁業者や住民などのいわゆる生産者が中心となって活動していかなければならないが、継続的な活動をしていく為には消費者となる一般市民の理解と応援も不可欠となってくる。今回実施したミニシンポジウムでは地元の漁業者や住民における一体感や理解は進んだが、一般市民への周知や理解までは至っていない。

その一方で、平成 24 年 5 月において、コープおかやま、岡山県、日生町漁業協同組合及び NPO 法人里海づくり研究会議の 4 者の間で、備前市日生町のアマモ場再生を始めとした“里海づくり”の推進に向けて協定が締結された。これはおかやまコープ組合員と漁業者、行政が一体となった活動であり、生産者と消費者の連携体制を深める大きな基盤となる。

ついでには、一般市民を対象としたシンポジウムを企画開催していく。日生の海を起点として、沿岸環境の変遷、漁業の現状と未来、地域の歴史と文化、里海と市民の関わりなど様々なテーマを設定し、海の大切さや海と人との関わり方などについて市民との意見交換を行い、学術と地域経済・文化との融合を図るとともに、里海づくりを広く推進する。

⑤写真等参考資料添付



山 陽 新 報

2012年(平成24年)7月4日 水曜日

豊かな里海つくる

日生で研究者らシンポ

魚介類の豊かな「里海」、備前市日生町日生「つくり」をテーマにしたシンポジウムが3日、漁業者や研究者、地元

住民ら約70人が、持続可能な海と人の関わりについて話し合った。

里海は、人の手を加えることで生物多様性や生産性が高くなった

沿岸海域を指す。

シンポは、研究者らが立ち上げたNPO法人・里海づくり研究会(奥田節夫理事長、事務局・岡山市)が主催。魚介類の産卵・成育場となるアマモ場再生などが進んでいる日

生町沖で、里海づくりを進めようと開いた。

生町沖で、里海づくりを進めようと開いた。果水産課の鳥井正也が主催だが、アマモ場が減少する可能性があることを報告。京都大学の藤原建紀教授が、漁業者や市民、

山市出身は「瀬戸内海」の海砂採取をやめたことで海の透明度が大きくなり、アマモが育つ条件ができた」と指摘した。

里海は、人の手を加えることで生物多様性や生産性が高くなった。生町沖で、里海づくりを進めようと開いた。果水産課の鳥井正也が主催だが、アマモ場が減少する可能性があることを報告。京都大学の藤原建紀教授が、漁業者や市民、

行政などの協働による里海づくりの重要性を訴えた。

会場の参加者とも討論。漁協組合員が「海底のヘドロを減らす方法は何か」と投げかけると、柳教授が「カキ殻をまいてみてほしい」と提案するなど活発に意見を交わした。

(河内慎太郎)